

アメリカ・マカー族博物館と「みなしご元禄津波」



奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長

松井 章

昭和27(1952)年、大阪府生まれ。昭和57(1982)年東北大学大学院文学研究科博士課程2年中退(専攻、考古学)。同年、奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部文部技官として採用。現在、(独)国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長。平成6(1994)年より京都大学大学院人間・環境学研究科客員助教授に併任。現在、同研究科 客員教授。専門：動物考古学・環境考古学。

北米北西海岸先史文化と縄文時代の考古学

20年以上も前、英国で開催された国際会議で、米国の考古学者、デール・クロース博士と知り合い、今に至るも交流が続いている。2001年には彼に連れられ、ワシントン州のオリンピック半島の北西端に位置する先住民、マカー族の居留地、ネアベイにマカー文化研究博物館を訪れ、地元のおゼット遺跡から出土したすばらしい木器や編物、建築部材の復原・展示に感激して以来、幾度もこの博物館に通うことになった。ネアベイにはいると、各交差点に交通標識とともに、‘Tsunami Evacuation Route’ (津波避難路) という矢印の入った標識が立っており、この村の人たちにとって、津波が身近な脅威だということがわかる。最近の研究でオゼット遺跡も津波によって滅んだことが明らかになり、是非、この博物館のことを日本でも知ってもらいたいと思うにいたった。

アラスカ南部からカリフォルニア北半にかけての太平洋、北西海岸の人々は、産卵のために毎年、大挙して川を遡るサケを保存食として、高い人口密度と複雑な社会組織を維持したことで知られている。著名な考古学者、G.チャイルドは、フランスのピレネー山麓の後期旧石器文化の繁栄が、こうしたサケを保存食とすることができたおかげと、この地域の民族誌を根拠に説明した。日本でも山内清男が縄文文化の人口や文化内容が、東日本が西日本にまさるといふ現象を、東日本の縄文人が、サケ・マス類を保存食に利用できたからと、彼らの民族誌を例に説明し、それがサケ・マス論として広く知られるようになった。そうした縄文文化と北西海岸先史文化の食料資源の比較研究も、私がこの地域に足繁く通う目的になっている。

ポットラッチへの参加とオゼット遺跡踏査

実は今年も7月28日から8月7日まで、ワシントン州の州都オリンピアで開催された先住民による伝統的なカヌーの祭典と、その後、1週間にわたって近隣のスクァシキン族が主催したポットラッチという供宴に招待され、日本の友人らを誘って参加し、

この原稿の下書きもこの地で書いている。

ポットラッチの中間の4日間、私たちはレンタカーを運転してネアベイに向かい、マカー博物館を訪問し、その翌日には、往復3時間をかけてオゼット遺跡を踏査することができた。この遺跡はオリンピック半島の北西端に近い太平洋に面し、1970年2月に嵐による高波が丘陵の裾を浸食し、崩落した崖面に、ロングハウスという彼らの伝統的な板張りの住居が5軒、そして屋内にはさまざまな生活用具が、そのまま残されて、姿をあらわしたことが世に知られるきっかけとなった。遺跡全体が一瞬のうちに土石流によって埋没し、そこに地下水が浸透し、酸素から遮断された環境が維持されたため、通常の遺跡では残らない木器やバスケットなどの繊維製品がそのまま保存されていたのだ。マカー族の人たちはすぐさまこの遺跡の重要性を認識し、ワシントン州立大学のリチャード・ドーアティー博士に発掘を要請し、彼を中心とした発掘は



オゼット遺跡遠景:太平洋に面し、すぐ前のTskawahyah島(通称、キャンボール島)が見張り場の役割を持つ。



復原住居が建つオゼット遺跡

1981年まで続いた。この発掘によって白人により領土を奪われ、疫病で人口が激減・疲弊する以前のマカー族の高度な物質文化と、その豊かさぶりがはじめて明らかになり、彼らはこれを「先祖からの贈り物」と呼んで、彼ら自身で博物館を建設し、出土遺物の保存処理や研究、啓蒙に励んできた。発掘後に刊行された報告書では、この遺跡の年代は、放射性炭素年代法によって約2000年から500年前とされたが、その後の研究でおどろくべき事実が明らかになった。

マカー族と地震・津波伝説

カナダのバンクーバー島からオリンピック半島、そしてオレゴン州の沿岸の先住民には、多くの地震や津波に関する神話や史実が伝承されていたが、20世紀の間に彼らの伝承は急激に失われ、文字に残せたのはわずか5パーセントに過ぎないといわれる。それでもマカー族やその他の北西海岸各地の人たちには、雷神鳥（サンダーバード）と鯨とが争い、雷神鳥がかぎ爪で鯨を持ち上げて大地や海に叩きつけることによって地震や津波が起きるといふ神話や、具体的な津波や地震の伝承がいくつも残されていた。しかし、そうした伝承はいつのことかはっきりしない、先祖からの言い伝えに過ぎなかった。

地質学からのアプローチ

近年、急速に発達した地質学、地震学の研究により、オレゴンからオリンピック半島にかけての太平洋岸の沖合には、「カスケード沈み込み帯」(CSZ)と呼ばれる海底プレートの潜り込みが存在し、過去に幾度も大地震が発生したことが明らかになってきた。その証拠の一つが太平洋に面した崖面に幾層も重なる津波による砂の堆積層で、ある地点では、砂層の下に石組みの炉跡が点々とあらわになっていた。さらに多くの地点では砂層の下に立ち枯れたスギの樹根の林が広範囲に広がっており、「幽霊の森」と呼ばれていた。それらのスギの年輪をはかったところ、多くのスギが1699年の夏の年輪を最後に立ち枯れたことが明らかになった。

私は東日本大震災の直後、被災した文化財のレスキューのために、石巻文化センターや陸前高田市立博物館を訪れた。そこで目にしたのは、津波によって巻き上げられ、屋内に堆積した大量の海砂だった。また陸前高田市では、無数になぎ倒されたマツの樹根と、一本の松だけが奇跡的に残った高田松原が記憶に残る。このような津波が残した特徴から、北西海岸全域を大きな津波が襲い、それが年輪の形成が停止する1699年の秋から1700年の春までの間に起こっ

た地震によることが、年輪年代学によって証明された。
みなしご元禄津波

意外なことに、この津波の手がかりは日本に残されていた。それは1700年1月26日、旧暦では元禄12年12月8日深夜から9日にかけて岩手県鉾ヶ崎、津軽石、大槌、茨城県那珂湊、静岡県三保、和歌山県田辺をおそった「みなしご元禄津波」で、親となる地震がないのに、子の津波だけが来たことにその名が由来する。盛岡藩代々の家老日誌である『雑書』には、元禄12年12月8日の深夜、大槌に津波が来て田畑や製塩の釜に被害が出たと記され、那珂湊では米を積載した船が流されたという公文書が残る。宮古湾に面した津軽石には、地元の盛合家に残る日記には、津波の到達した範囲が記され、1960年のチリ津波との比較が可能となり、はるかに規模が大きかったことも判明した。

こうした日本の津波記録から逆算すると、親となった地震は、カスケード沈み込み帯を震源とするマグニチュード9クラスの大規模なもので、1700年1月26日午後9時頃に発生し、その津波が日本列島に達するまで約10時間かかったことまで推定された。

これまでオゼット遺跡は、雪解け水が引き起こした土石流によって埋没したと説明されてきたが、どうやらこの地震とそれに引き続いた津波によって壊滅的な打撃を受けたことが確定的になった。この遺跡に人が住み着いたのは2000年以上前のことで、1700年に甚大な被害を受けたにもかかわらず、クジラや海獣の狩猟・サケやオヒョウなどの魚撈に適した地の利のゆえ、その後も季節的なキャンプ地として細々と利用されたが、1930年を最後に無人となったという。

オゼット遺跡は、世界にも例を見ない木器や編物などの繊維製品の保存状態に恵まれた遺跡としてだけでなく、地質学や地震学、年輪年代学、さらに日本の津波に関する古記録の研究成果が見事に統合され、その劇的な歴史を紐解くことに成功したといえる。その研究の概要は、下記の文献に詳細に記述されている。

Brian F. Atwater, Musumi-Rokkaku Satoko, Satake Kenji, Tsuji Yoshinobu, Ueda Kazue and David K. Yamaguchi “*The Orphan Tsunami of 1700—みなしご元禄津波 Japanese Clues to a Parent Earthquake in North America—親地震は北米西海岸にいた*” University of Washington Press 2005.

帰国後、このみなしご津波の研究が地震関係者の間では有名だったことを知り、自分自身の不明を恥じる次第である。本書は日本語や写真・図版も豊富で、英語も平易なので一読をお奨めする。

(まつい・あきら)